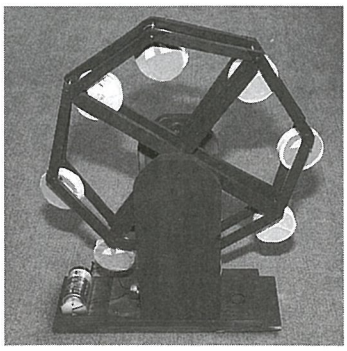
あつまれ みんなの力作

4年
椎名崇文くん

※工夫したところは、紙コップをつかってのるところを作ったところです。



『かんらんしゃ』

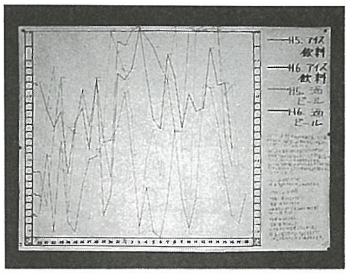
1年
伊藤実希さん

※お金を入れるあなをあけるのがたいへんでした。

『にんぎょうのちょきんばこ』

5年
増島紀弘くん

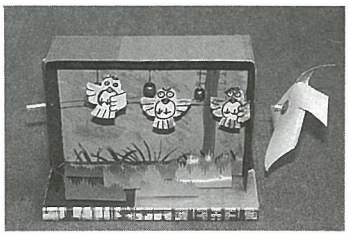
※レシートで売り上げを調べるのがたいへんでした。



『気温の変化による
飲み物の売り上げ』

2年
川島たくやくん

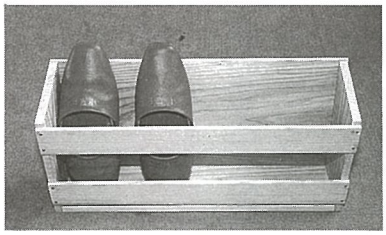
※かざぐるまとふうりんをつくって、いっしょになればいいなと思ってつくりました。



『かざぐるまふうりん』

6年
布施　強くん

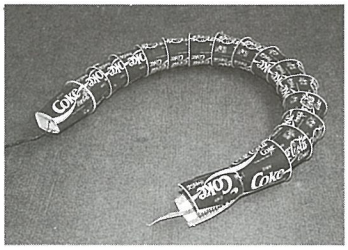
※くぎをまがらないように打つのがたいへんでした。



『スリッパ入れ』

3年
内藤彩子さん

※へびのくねくねと動く感じをだすのがたいへんでした。



『へ　び』

日吉小学校

ひかり俳壇

土偶の目宙を見ている晩夏かな　布施　和代（二又）

晩夏の空を見詰める埴輪土偶の目を詩情豊かに詠んでいる。下五の措辞が的確。

夏帽子大きくふって孫帰る　布施喜美雄（二又）

祖父と孫、さぞ慈しみ育てられたに違いない明るい家庭の一駒が中七で活写された。

送り火の絶ゆるまで佇ち香をまとふ　椎名　静子（二又）

盆の十六日に精霊を送る火であり、作品は亡き人への慕情の深さを思わせる。

地のほてりいづくえ去るや星月夜　秋山　一泉（栢田）

性急な親父であったと門火焚く　川島　通則（二又）

茅屋根の静まりかえる良夜かな　川島　孝夫（二又）

潮焼けの顔赭々と孫帰る　大谷　武彦（木戸）

評者吟

巻雲に飛機突込めり敗戦忌

短評　椎名しげる